［地域総研紀要　15巻１号, Ｐ５－22（2017）（一般論文）］

# 寒村トウリヤからサンクト・ペテルブルク大学までの足跡を追って*

## ― P. A. ソローキン『長い旅路』第２部をめぐる現地調査 ―[1]

吉野　浩司**

# Footsteps from a Poor-Village Turya to St. Petersburg University:

## —Field Work about P.A. Sorokin's *A Long Journey* Part II—

Koji YOSHINO**

**はじめに**

ピティリム・アレクサンドロピッチ・ソローキン（Pitirim A. Sorokin = Питирим Александрович Сорокин, 1889-1968）は、1889年１月23日、ヴォログダ県ヤレンスキー郡トウリヤ（Турье, Яренского уезда, Вологодской губернии、地図①）という村で生まれた。トウリヤ村は、現在の行政区画でいうと、コミ共和国クニャシュポゴスツキー区（Княжпогостский район, Республика Коми）に属する。外部との交流の少ない寒村であることに関していうと、百数十年の昔とさして変わるところはない。

幼くして母を亡くしたソローキンは、しばらく父の仕事を手伝いながら生活をしていた。父の職業というのは、地方の村々を歩き回って教会や聖像の修復を手掛ける職人であった。普段は優しい父であった。だが酒乱の気があった。父の暴行を機に、ソローキンは兄とともに故郷を離れる決意をした。兄と２人で聖像修理をしながら、各地を転々とする。

そうした理由から、ソローキンは1901年に、ようやくパレヴィツィ村（Палевицкой волостей）で初めての教育を受けた。彼が11歳の時である。誰から教わったかはわからないが、読み書きはそれ以前に覚えていたという。コミ族は識字率が高いことにかけては、昔から有名であった。

その後、1903年にガム村（Гамской волостей、地図②）の中等学校を卒業する。同年８月に、コストロマ州のロシア正教系のフレノヴォ教区師範学校（Хреновская церковно-учительская семинария）に進む。成績優良のため、ここでは幸運にも奨学金を得ることができた。しかし入学後、直ちに社会革命党員として活発に活動を行った。そのため1906年には、放校処分となってしまう（写真[2]、校舎の壁に掲げられたレリーフ）。これがソローキンの人生の、一大転機となった。

コミ族出身の彼がいかなる環境のもとで育ったのかについては、2015年１月に行った調査で、あるていど明らかにしたところである。前回の調査の目的は、コミ共和国を直接訪れ、ソローキンがいかなる自然的、文化的な環境のもとで自らの思想基盤を育んだのかを明らかにすることであった。そこで得た知見の１つが、彼の「よそ者の目（第三者の視点）」であった。すなわちロシアの寒村出身者であったからこそ、ソローキンはサンクト・ペテルブルク（Санкт-Петербург）に対しても、あるいは先進文明国であるヨーロッパに対しても、あこがれとともに第三者の視点で客観的に観察することができた、ということである[3]。

今回調査したのは、それから後のソローキンの足取りについてである。依拠した資料は、自伝『長い旅路』[4] 第２部である。そこには、全３章にわたって、田舎の青年が大都会ペテルブルクへたどり着くまでの物語がつづられている。あらかじめ第２部の章題を示しておくと、第４章「サンクト・ペテルブルクでの大学入学以前」、第５章「ペテルブルク大学学部時代」、第６章「教員になる準備：1914年～1916年」となる。

調査は、移動時間を含めて2016年９月10日から23日までの、13泊14日の日程でなされた。ソロー

* Received January 12, 2017
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

キンの自伝の記述とは相前後するところもあるが、この調査旅行の日程に沿って、彼の足跡を訪ねてみることにしたい。

調査旅行関連地図

①トウリヤ（現クニャシュポゴスツキー）、②ガム（現ウスチ・ヴィムスキー）、
③ソリヴィチェゴドスク、④ヴェリキイ・ウスチュグ、⑤ヴォログダ、⑥ヤロスラーヴリ、
⑦ベジェツク、⑧モスクワ、⑨サンクト＝ペテルブルク、
⑩ヘルシンキ、⑪ウズベキスタン、⑫タジキスタン

---

[1] 本研究は科研費 基盤研究（C）「研究課題：初期ソローキン社会学にみる利他主義研究の萌芽―ロシア時代の未公刊・新資料の分析」（16K04043）の助成を受けたものである。

[2] 特に断りがない限り、本稿で用いる写真は、すべて筆者が撮影したものである。

[3] 吉野浩司、2016、「『長い旅路』のはじまり―ロシア・コミ共和国におけるソローキン研究動向を中心に」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第14巻第1号、71ページ～83ページ。

[4] Sorokin, P.A, 1963, *A Long Journey: the Autobiography of Pitrim A. Sorokin*, College and University Press.

## １．サンクト・ペテルブルクの「モスクワ」駅

今回、主たる調査研究の拠点とした都市は、ロシア第二の都市サンクト・ペテルブルク（Санкт-Петербург）である。

サンクト・ペテルブルク、この地名は、歴史上、幾度かの変更を経ている。本来、ピョートル大帝（Пётр I Великий, 1672-1725）の都という意味で名付けられたサンクト・ペテルブルクは、帝政ロシア時代を通じて、ロシアの首都であった。その後、第一次世界大戦開戦により1914年から1924年までの期間、ペトログラード（Петроград）に呼び名が変えられた。それはブルク（都市）というドイツ語風の地名を忌み嫌ってのことである。ロシア語の「都市」を意味するゴーラド（град）に末尾を改めたのがペトログラードである。さらに社会主義国家が成立した、ソビエト連邦時代になってからしばらくして、英雄レーニンの名前にちなんだレニングラード（Ленинград）が採用された（1924年～1991年）。社会主義体制が崩壊したのち、国名がソ連からロシアに回帰したように、レニングラードもサンクト・ペテルブルクへと旧名に復した[5]。

日本から、このサンクト・ペテルブルクへの移動手段として今回利用したのは、福岡空港に発着するフィンランドのフィンエアーである。行きは福岡からヘルシンキまで11時間かけて飛び、その後、約５時間のトランジットの後、さらに１時間ほどの飛行で、ペテルブルクのプルコヴォ空港に到着する。

**９月11日（日）往路**

○福岡国際空港　9：30　→　13：55 ヘルシンキ・ヴァンター国際空港（Finnair 76便）

○ヘルシンキ・ヴァンター国際空港　17：55　→　19：05 ペテルブルク・プルコヴォ国際空港（Finnair 169便）

**９月22日（木）復路**

○プルコヴォ国際空港 12：00　→　13：10　ヴァンター国際空港（Finnair 166便）

○ヴァンター国際空港 16：30　→　8 ：00 福岡国際空港（Finnair 75便）

筆者にとって初めてとなるサンクト・ペテルブルクは、９月11日の夕刻からのスタートとなった。バスと地下鉄を乗り継いでホテルに向かうことにした。ロシアの交通手段としては、遠距離であれば鉄道、近距離であればバス、さらに都市部であれば地下鉄やトラムが走っている。むろんペテルブルクにはそれら全てが備わっている。

鉄道の駅名は機能的で、行先の地名をつけることになっている。例えばモスクワ行きの鉄道を利用したい場合はモスクワ駅、隣国フィンランドまで鉄路で行きたい場合はフィンランド駅にという具合に、行き先が、そのまま出発駅の駅名となっている。はじめのうちは戸惑うが、慣れると実に合理的な名付け方だと感じる。

ただ、失敗もある。今回初日に泊まるホテルの近くにモスクワ駅があった。バスの路線図にモスクワ駅があったので、飛び乗った。思ったより早く着いたのでおかしいと感じつつ下車した。降りてから気づいたのだが、そこは地下鉄モスクワ駅であった。いずれもモスクワ駅なのだが、ロシアでは鉄道の駅はヴァグザールвокзал、地下鉄の駅をスタンツェアстанцияと使い分ける。またそれぞれの上につくモスクワという地名にも語形変化がある。地下鉄のモスクワ駅はМосковская станция、鉄道のモスクワ駅はМосковский вокзал、というぐあいに。マスコフスカヤ・スタンツェアとマスコフスキー・バグザールを訳すると、同じモスクワ駅となるのである。

初めてのペテルブルク入りに、いきなり失敗をしてしまったおかげで交通手段の呼称や乗り方をマスターできた。交通運賃は概して安価である。地下鉄やバスに１回乗るごとに、50円ぐらいの感覚であろうか。特徴的なのが、バスの中で切符を確認する係の人である。係は不正乗車をしていないか、常に目を光らせている。現金で乗車する場合、運賃を支払うと、その係の人から、紙テープ状に巻かれた紙を３センチほどちぎって渡される。そのテープに切符が印刷されている。むろん

[5] 本稿では、煩を避けるため、こうした名称変更を考慮せずサンクト・ペテルブルクないしその略称ペテルブルクに呼称を統一した。ペテルブルクの歴史に関しては、下記のアレクサンドル・マルゴレス（Александр Марголис）の記事が、たいへん有益であった。例えばソローキンが住んだアパートなどの住所まで示してある。Александр Марголис. Очерки Града Петрова（13）. Петербуржцы: историк И.М. Гревс（1860-1941）; социолог П.А. Сорокин（1889-1968）? Когита!ру. なお彼の近著に『ペトログラード―歴史と現代』がある。Александр Марголис, 2014, *Петербург : история и современность*, Избранные очерки.

バスカードもある。その場合、正しく機械にかざしたのかどうかをチェックするのも係の役目である。混雑していても見分けられるよう、専用の機械を携帯して車内を行き来して、不審な乗客を見張っている。運賃が安いにもかかわらず、これほどまでに無銭乗車の取り締まりが厳しいのか、ということがひどく印象に残った。

最初に宿泊するホテルは、５連泊する拠点となる場所だから、慎重に選んだ。モスクワ駅からホテルまでは、10分程度の距離のはずだったが、日が暮れている上に、慣れない土地であることから、道に迷ってしまった。さいわい夜道を歩いていても治安の悪さを感じることはなかった。着いた頃には、22時を回っていた。かなり遅れてのチェックインであったが、ホテルのフロントも普通に応対してくれた。その日は移動の疲れから、ぐっすり眠った。

## ２．ソローキンがペテルブルクにたどり着くまで

ソローキンはペテルブルクに来るまでの一時期、叔父ミハエルと叔母アンナの住むヴェリキイ・ウスチュグ（Великий Устюг、地図④）にいた。フレノヴォ師範学校を放校されて後のことである。そこでのカリストラト・ファラレヴィチ・ジャコフ(Каллистрат Фалалеевич Жаков, 1866-1926)との運命的な出会いにより、帝政ロシアの首都サンクト・ペテルブルクへの上京を決意する[6]。ジャコフはコミ出身の人類学者で、ペテルブルクに新設された心理精神研究学院の教授をしていた(詳しくは、下記の要旨を参照)。

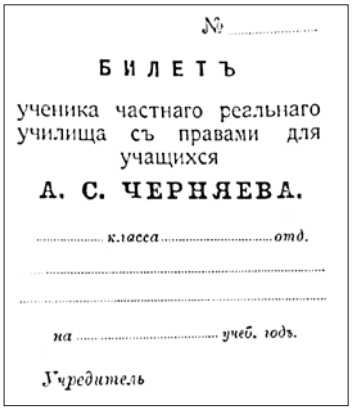
「第三者の視点」から見た新興都市ペテルブルクとは、どのような都市であったのか。また、そこで行われていた学問は、彼の目にどのように映じたのか。自伝『長い旅路』第４章「ペテルブルクの大学時代以前」に依りつつ、まずはそのあたりの事情から振り返っておくことにしたい。

〔要旨〕『長い旅路』第4章　ペテルブルクの大学時代以前

1907年９月のある朝のこと、ソローキンはペテルブルクへ向けて旅立つ決意をする。ウスチ＝ヴィムスキー（Усть-Вымский、地図②）にある村リミヤ（Римья）の港から、船出する。途中、ヴェリキイ・ウスチュグ（地図④）に住む、叔父と叔母のもとを訪ねる[7]。

リミヤからヴォログダまでの船旅には、もっとも安価な蒸気船クプチク（Купчик）を利用した。この小船では、ヴォログダ港まで６日間を要した。その後、ヴォログダからは、ようやく鉄路に切り替えることができる。ペテルブルクまでは鉄道が走っていた。

ここでの鉄道の旅のことを、彼は「汽車に乗った『野うさぎ』」と諧謔を交じえて表現している。ここでいう「野うさぎ（зайцевые)」とは、いったいどういう意味なのだろうか。現代のロシア語でも「野うさぎで電車移動をする(проехать на поезде зайцем)」といえば、「汽車の乗り逃げをする」という意味になる。野うさぎ、つまり無銭乗車でソローキンはペテルブルクまで行ったのである。彼はほんのわずかのお金しか所持していなかったからだ。


№ .....

БИЛЕТЪ

ученика частнаго реальнаго училища съ правами для учащихся

А. С. ЧЕРНЯЕВА.

..... класса ..... отд.

.....

.....

на ..... учеб. годъ.

Учредитель

むろん、車掌はうさぎ狩りに目を光らせる。あえなくソローキンは、車掌に見つかってしまった。ただソローキンが幸運であったのは、車両掃除の仕事をするという約束で警察に突き出される難を逃れたことで

[6] ソローキンの伝記的記述に関しては、一般に『長い旅路』が用いられることが多い。しかし1909年３月３日に書かれた、ソローキンの手になる略歴が、ヴォログダ公文書館で発見されている。短文ながらも、この略歴はペテルブルク大学入学直前までの「近況」を描き出している点で、見逃せない貴重な記録である(Фонд 234. Опись 1. Дело 62. Листы 25-26 // Велико-Устюгский филиал, Вологодского областного государственного архива)。ジャコフとの出会いが、ペテルブルクに出る以前のことであったことは、この短文にしか書かれていない。

[7] 地名にあるウスチというのは、ロシア語のウスチエ（Устье）すなわち「河口」を意味している。ロシアでは河口に港町がさかえる。そこで河口にある街の名前にウスチの語が数多く用いられる。

ある。車掌の手伝いをしながら、ソローキンはペテルブルクにたどり着くことができた。

サンクト・ペテルブルクでは郷里の友人パヴェル・ココフキン（Павел Коковкин）[8] を頼った。ペテルブルクでの学びは、まず夜間学校チェルニャエフ・コース（Черняевские курсы、写真チェルニャエフ・コースの学生証、後述のマリーナ氏提供）から始まった。自らも教鞭をとった校長のチェルニャエフ（Александр Сергеевич Черняев, 1873-1916）は、ヴォログダ出身の知識人であった。ただし夜間学校とはいっても、かなり高度な教育がなされていた。古典から現実科学までの高度な学問に触れ、ソローキンは知的好奇心を駆り立てられた。教授陣の中には、ペテルブルク大学から教えにくる教授もいた。わけても初期のソローキンに圧倒的な影響を与えたベフテレフ（Владимир Михайлович Бехтерев, 1857-1927）やジャコフがいたことは、忘れてはならない。

自伝には、ジャコフに関する比較的詳しい記述がある。それによるとジャコフはコースでの授業の他に、彼が主催する「文学夜会」も開いていた。ソローキンはその会に参加したり、ジャコフの主導する人類学的調査の手伝いをしたりするなどして、ジャコフと親密な関係を築くことができた。もう一つ、このジャコフが主催する夜会で注記すべきことがある。それは、この文学夜会で、女学校に通う美しい女性と知り合いになったことである。この女性が、後年、妻となるエレナ（Елена Петровна Баратынская, 1894-1975）であった[9]。

同じ時期、フレノヴォ師範学校の後輩の１人も、ペテルブルクの夜学に移ってきた。それが後に世界的な経済学者として名を残すことになる、ニコライ・コンドラチェフ（Николай Дмитриевич Кондратьев, 1892-1938）である。ソローキンと彼は、同郷の徒として同居した。コンドラチェフは、1927年にミネソタでソローキンと面会したのを最後に、ロシアで亡くなっている。スターリン政権下での処刑であった。

1909年２月、叔父と叔母の住むヴェリキイ・ウスチュグ（地図④）へ引きこもる。６月にある大学受験資格を得るための試験に備えるためだった。この試験にソローキンは優秀な成績で通過することができた。それにより、彼はどこの大学を受けてもいい身分になった。試験を受けた後も、ソローキンはこの地で数ヶ月を過ごした。そこで生涯の友となるペトル・ジェパロフ（Петру Николаевичу Зепалову, 1892-1918）やヴァシリー・ボガティレフ（Василий Богатырев）とも出会っている。特にジェパロフは、ソローキンと同じペテルブルク大学法学部で学んだ。反ツアリー思想を表明していたトルストイの死に寄せて書いた一文が当局の目に留まり、ジェパロフは大学を退学処分となる。その後は、モスクワ大学法学部へ転じる。しかし、革命後の1918年10月にＫＧＢの手により処刑された。ソローキンは『社会学システム』を、ジェパロフに捧げている[10]。

こうしてヴェリキイ・ウスチュグ（地図④）での充実した日々を送ったソローキンは、1909年９月、この地を後にする。

---

[8] 自伝のロシア語訳者をはじめ多くの学者が、正式な名前はパヴェルではないとしている。正しくは、ヒョードル・ニコラエヴィチ・ココフキン（Фёдоре Николаевиче Коковкин）であるとしている。П. Сорокина, 1991, «Долгий путь» назван Павлом.

[9] 彼女はセバストポリ女子高校を卒業後、ペテルブルクに出て、そこでソローキンと知り合った。通った大学は、1878年から1918年まで開かれていた学校ベスチュジェフスキー・コース（Высшие женские Бестужевские курсы в Санкт-Петербурге）である。ここはロシア初の女子大学で、彼女はこの大学を1917年に卒業する。ちなみに彼女は生物学を学んでおり、ソローキンとともに亡命した後、1925年にミネソタ大学で博士号を取得している。

[10] ソローキンとジェパロフの関係については、後述のレオニード氏の詳細な記録がある。Панов, Леонид Сергеевич, 1993, “Великий Устюг в жизни и творчестве Питирима Сорокина,” *Бысть на Устюзе, Историко-краеведческий сборник*, Вологда: «ЛиС» С. 110–117: ил.

さて、今回の調査旅行の目的は、その道をたどることを目的としている。つまり彼が故郷からボロ船でヴォログダへと向かい、そこで汽車に乗り換えてサンクト・ペテルブルクに入った、その足取りを追うこと、それがこの調査旅行の目的である。

### ３．壁を埋め尽くす古書の壁

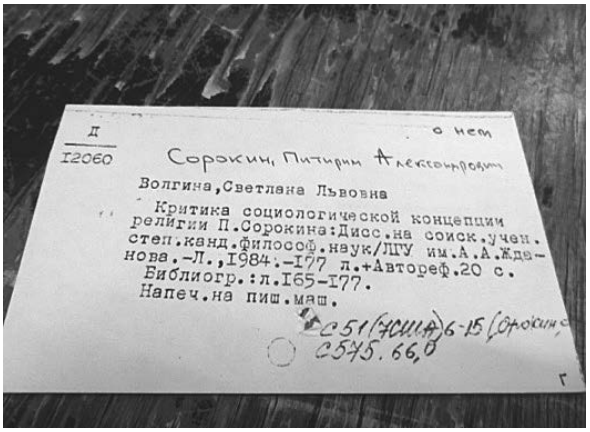
９月12日朝、さっそく今回の調査の１日目が始まった。サンクト・ペテルブルク大学付属図書館を訪れることになっていた。

サンクト・ペテルブルク大学といえば、ソローキンが卒業した大学（1910年から1914年まで法学部に在籍）であり、また教鞭を執った大学でもある。何より社会学部を設立したメンバーの１人がソローキンであった。筆者にとって、憧れの場所である。1910年代当時を思い起こすと、コヴァレフスキー（Максим Максимович Ковалевский, 1851-1916）やペトラジツキー（Лев Иосифович Петражицкий, 1867-1931）やドロベルチ（Евгений Валентинович Де Роберти, 1843-1915）といった、世界に名だたる社会学者が顔を揃えていた。現存する朱塗りの壁の校舎は、当時の面影を今に伝える。大学付属図書館は、その２階にある（写真）。

本日、案内役を務めてもらうのは、ペテルブルク大学準教授マリーナ・B・ロマノソーヴァ氏（次節で紹介する）である。彼女と大学の門の前で待ち合わせをしていた。時間通りに現れた彼女と、初対面の挨拶もそこそこに、図書館へと向かう。18世紀以前の文献とおぼしきアンティークと化した古書が、廊下の片方から、かなり遠くのもう一方の突き当りまで、惜しげもなくびっしりと展示されている。まさに圧巻の陳列であった。

マリーナ氏は、司書のリュドミラ・アレクサンドロヴナ（Людмила Александровна）氏に、「ソローキン関連図書を見に、日本から研究者がやってきた。見せていただくことは可能か」と交渉してくれた。特別のはからいで、許可を得ることができたが、100年前の貴重本でもあり、また幾つかに分けて保管されているとのことで、後日改めて来るようにと指示を受けた。

図書館で文献を探す場合、現在はウェブ上での検索が可能である。しかし、ここの古い図書カードも見せてもらうことにした。ソビエト時代の大学院生が書いた、ソローキンを批判する博士論文などもあり、大変、興味深かった（写真）。




その後、マリーナ氏に大学校内を案内してもらう、ソローキンが講義したことのある教室は、図書館の棟、それから裏手にある棟にある。裏手の建物は、入ってはみたものの、あいにく修復工事中で、さすがに教室まで立ち入ることはできなかった。ソローキン時代の建物であっただけに、入れなかったのは心残りであった。

次に向かったのは、プーシキンの家博物館（Музей-квартира А. С. Пушкина）である。この博物館は、マリーナ氏がサポフ氏との共同調査で、ソローキンが書いた未公開資料を発見した場所である。その資料というのが、ソローキンが亡命直前に知り合いの出版社に渡したという原稿である。この発見は、「ソローキン著『予兆』―政治的混乱に巻き込まれた社会学者の自伝的小説」[11] という論文にまとめられている。原稿『予兆（Предтеча）』は、結局、出版されることなく、この博物館の書庫に保管されていた。所蔵資料の中

[11] Ломоносова М. В., 2016, «Предтеча» Питирима Сорокина. Автобиографический роман социолога, вовлеченного в водоворот политики // *Социологические исследования*, № 5. С. 134-140.

には、この原稿の他、詩や文学的な作品も含まれているという。社会学者としてのソローキンとはまた別の一面が、マリーナ氏の発見により明らかとなった。

その後、ソローキンが住んでいたというアパート（住所は№ 31 по 8-й линии Васильевского острова）に立ち寄った。アパートの壁面には、モニュメントの石碑（写真）が埋め込まれていた。碑文には、「1918年から1920年まで住まう、偉大な思想家、20世紀の社会学者ピティリム・ソローキン」とある。アパート内部の間取りなども見学したかったが、入ることは断念した。

ソローキンにとってペテルブルクでの学生生活とは、どのようなものだったのだろうか。何を学び、どのような活躍をしたのか。ふたたび彼の自伝に依りながら、そのことを確認しておくことにしよう。

〔要旨〕『長い旅路』第５章　ペテルブルク大学学部時代

1909年秋、ソローキンは心理精神研究学院（Психоневрологический институт）に入学する。ここでは、コヴァレフスキーやドロベルチらが、新興の科学であった社会学の講義を行っていた。そのことが、ソローキンをこの学校に進ませた最大の理由である。ただ通学のために、ソローキンは徒歩で２時間の距離を歩かなければならなかった。それで出席する講義の選定は、かなり慎重を期したのだという。

さいわい当時のロシアの大学教育のやり方は、たいへん自由であった。出席確認や定期試験あるいはレポートなどはなかった。ただし、それは単位の認定が容易であったということを意味しない。出席や定期試験の代わりに、膨大な文献リストが与えられたという。受講生は、それらの本をかたはしから読破しなければならなかった。

そこでソローキンは、「自らに課すルール（self-imposed rule）」を定めた。第一に、自分が講義に出席する条件として、その講義が真に独創的で価値あるものだと認めた場合。第二に、その講義で話される内容が未発表・未刊行のものであること。そうした場合に限り、ソローキンは長い時間をかけて講義に出向くことにした。一例を挙げよう。当時、研究学院には、ペトラジツキーによる有名な法学講義があった。ソローキンも尊敬してやまないペトラジツキーの講義である。それにもかかわらず、彼は出席しなかった。なぜだろうか。理由は簡単である。そのペトラジツキーの講義内容は、『法および道徳研究序説（Введение в изучение права и нравственности）』その他の著作に書かれていたからである。本来であれば、週三回の講義を１年間受講し続けなければならない。しかし、ソローキンは、彼なりのルールを行使し、講義を聴く代わりに、これらの著作を２週間かけて熟読し、自家薬籠中のものとしたとしている。

もちろん、いくら熟読しても、難解なところ、疑問に思うところは出てくるだろう。そうした時には、直接会って質問をするのだという。ソローキンはしばしば著者のもとを訪ねるようにした。多くの教員は、質問に快く耳を傾けてくれたという。そうして親交を深めた学者の代表がペトラジツキーをはじめ、ドロベルチ、コヴァレフスキー、ベフテレフといった当時一流とされていた学者たちであった。これらの親交により、ソローキンは才能を評価され、コースの助手、あるいはリサーチアシスタントに選出された。またレスガフト大学（Университет Лесгафта）の助手にも任命された。

こうした理由から、ソローキンの暮らし向きはよくなった。その結果、かねてより同居して

いたニコライ・コンドラチェフとともに、いくらか広いアパートに引っ越すことができた。余った部屋については、女子大学（Бестужевские курсы）に通う学生２人、それからオペラ団体（Нородный дом）に所属する女性１人に間貸しすることにした。コンドラチェフとソローキンは、その気さえあれば、さらに稼ぐことはできたが、自分の時間の方を大切にした。そして残りの時間は、社会革命党の運動に加わり、ツアリー打倒のための活動に充てた。社会革命党の基本的なスローガンは、思想家ラヴロフ（Пётр Лаврович Лавров, 1823-1900）のいう、「批判的思考と倫理的責任のある人間」であったという。

1910年晩春、サンクト・ペテルブルク大学へと移ることができた（写真、大学のエントランス）。夏休みには、ウスチュグ（地図④）とリミヤ（Румия）に遊んだ。この時ソローキンは、コミ族およびコミ文化に関する人類学的調査を行った[12]。ペテルブルクに戻ったのは９月である。

ペテルブルク大学での社会学講義は、法学部（Юридически факултет）のコースの中で扱われていた。教授陣の中には、歴史学者コヴァレフスキー、法学者ペトラジツキー、経済学者トゥガン＝バラノフスキキー（Михайло Туган-Барановський, 1865-1919）らが名を連ねていた。そうした多様な分野の優れた教師に囲まれて、ソローキンは学ぶことができた。

後年彼は、これらの教授たちから、各種雑誌の編集を依頼されている。ドロベルチからは『社会学の新思潮（Новые идеи в социологии）』、ペトラジツキーからは『法学の新思潮（Новые идеи в правоведении）』、またベヒテレフ（Владимир Михайлович Бехтерев, 1857-1927）からは『心理学・犯罪学・人類学・催眠学ジャーナル（Вестник психологии, криминальной антропологии и гипноза）』の共同編集を頼まれた。

1910年11月20日、トルストイ死す。ペテルブルクの各地で、追悼集会が執り行われた。これは反ツァーリ学生集会の意味合いもあった。その１つに参加したソローキンは、追悼文[13]を読んだ。そのため彼は警察に捕まえられてしまう。1911年１月のことである。このときは病気の友達を見舞うという口実の下、イタリアに逃れ、逮捕を免れることができた。これがソローキンにとって初めてのヨーロッパ体験となる。ニースやモンテカルロを歴訪し、立ち寄ったウィーンでは、1908年に出されたジンメルの『社会学－社会の形式に関する研究（*Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*）』を購入するなどした。

帰国後、ソローキンは卒業試験を受けなかった。反ツァーリの意思表示だという。そうした経緯もあって、1913年３月、夕方おそく、秘密警察がソローキンを捕まえにきた。この時ばかりは、逃げることなく収監を覚悟した。ソローキンにとってはツァーリ政権による最後の投獄となった。留置所でマーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）の『ミシシッピの生活（Life on the Mississippi）』を読んだことで、アメリカに対するイメージが膨らむ。しかし、まさか後年、自分が亡命し住むことになるなど、想像だにしなかった。出獄後、刑務所内での見聞を盛り込んだ研究書『罪と厳罰（Преступление и кара）』（1913年刊行）を出版することで、1914年に大学を第一級の成績で終えることができた。そして、これに続く２年の間に、ソローキンは社会学の教授となるための準備を整える。

[12] 前回の調査をまとめた拙稿において、筆者は、このソローキンのコミ族に関する民族誌調査についても触れている。吉野浩司, 2016,「『長い旅路』のはじまり－ロシア・コミ共和国におけるソローキン研究動向を中心に」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第14巻第1号, 71頁～83頁.

[13] とはいえ、そこまで過激な内容の文章であったというわけではない。ソローキンのトルストイ論については、拙訳がある（吉野浩司（訳）, 2016,「哲学者としてのЛ.Н.トルストイ」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』第14巻第1号, 53頁-65頁）。

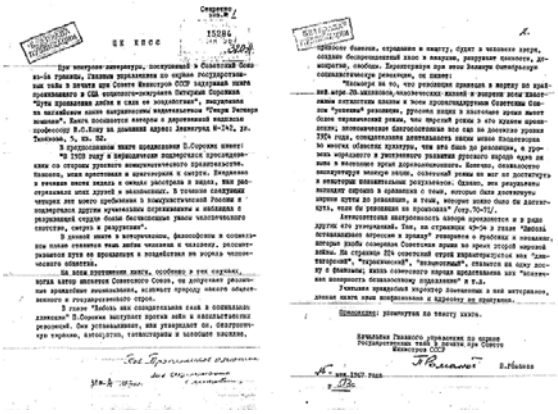
## ４．マリーナ氏宅での資料閲覧

ここで、ふたたび現地調査の報告に戻り、現在のペテルブルク大学社会学部の状況をここで紹介しておきたい。今回の、ペテルブルクでの調査および公開講義を全面的にサポートしてくれたのは、ペテルブルク大学社会学部准教授マリーナ･B･ロマノソーヴァ（Марина Васильевна Ломоносова、写真）氏である。

彼女のことは、かねてより文献で知っていた。先述のように、ロシア時代のソローキンの事績の中でも、ほとんど知られることのなかった初期の小説を探し当てるなど、地味ではあるが堅実な、ロシアのソローキン研究の中でも群を抜く業績を上げられていた。簡単に彼女の略歴と研究歴を紹介すると、下記の通りである。

1997年　スイクティフカル大学卒業（社会福祉学科専攻）
1998年　サンクト・ペテルブルク大学社会学研究科入学（～2001年）
2001年　サンクト･ペテルブルク大学社会学理論･社会学史学部　助手就任（～2006年）
2006年　サンクト・ペテルブルク大学　博士号取得（社会学）
2006年～現在　サンクト・ペテルブルク大学社会学理論・社会学史学部　准教授就任

９月13日、この日はマリーナ氏宅で、彼女が収集した資料を閲覧させてもらうことになっていた。ソローキン未発表の小説や詩の類、あるいは新聞記事などの蔵書・コピーを見せてもらった。その中で、とりわけ興味深かったのは、旧ソ連時代のKGBの極秘文書である。これは共産党員の手になる、痛烈なソローキン批判である（写真、マリーナ氏提供）。1922年に亡命したソローキンが、旧ソ連の時期にあたる1960年代に、どのような扱い方をされていたのかなどを知る手がかりとなる、貴重な資料である。



マリーナ氏とは、かなり細かな話をすることができた。現在、スイクティフカルのソローキン研究所が進めている全集を見ても、あるいは昨今のソローキンの著作目録を見ても、1910年からの文献しか記載されていない。ソローキンの執筆・刊行の年代は、あと３年ほどさかのぼり、1907年に設定しなければならない。それがマリーナ氏の主張である。むろん、その根拠となるような発掘、紹介の仕事が、マリーナ氏の現在の課題の１つとなっているのはいうまでもない。

なお、筆者が今回の調査地として予定していたヴォログダへも、昨年すでに彼女は調査をすませていた。結論からいうと、地方史文書館や図書館では、これといった資料は見つからなかったそうだ。そのこともあったのだろう、「あなたのヴォログダ調査旅行の目的は何か」と尋ねられた。筆者は、コミ共和国からヴォログダへの船旅の船着場を確認することと、ソローキンが無銭乗車した鉄道の道をたどること、この２つの目的を告げた。

マリーナ氏のアパートへ向かう途中、ペテルブルク郊外の新興住宅の建築現場について思うところがあった。訪問した時も、マリーナ氏宅の近隣では、高層マンションの建築が進められていた。そこで目にした光景が忘れられない。それは工事現場の敷地内に積まれたコンテナである。マリーナ氏の説明では、ウズベキスタン（地図⑪）やタジキスタン（地図⑫）から来た出稼ぎ労働者の仮設住居だという。夏であろうが冬であろうが、冷暖房設備のないそ

のコンテナの中で彼らは過ごしているらしい。そして建築中の建物が完成したら、また別の場所へとコンテナごと移っていくのだという。過酷な労働の現場である。これらウズベキスタンやタジキスタンから来た労働者の中から、市民権を得て、恵まれた人生を送れるようになる人が、はたして幾人いるのだろうか（写真、マリーナ氏宅から見下ろす建設現場。下の方に居住用のコンテナが並ぶ）。

現代のグローバル化社会は、「社会移動（social mobility）」の多い時代であるといわれる。しかしそれは、水平移動すなわち地理的な移動のみを念頭に置いて語られているのではないだろうか。垂直移動、すなわち階層の移動の方は、かえって少なくなったのが現代という時代ではないだろうか。ソローキンが『社会移動』[14] を書いた当時は、垂直と水平の双方の社会移動が、それなりに活発に行われていた。階層を転倒させるような革命現象が起きたロシアでの出来事を、身をもって経験したのもソローキンである。人々の平等性を保証するものとしての「社会移動」、という考え方を彼は有していた。貧しい寒村出身者であったソローキンは、大都会へ出て、さらには国外へと移り住んで、世界的に著名な大学教授となった。確かにそこまで上り詰めるためには、ソローキンが、人並み外れた能力を持ち、想像を絶する努力をしたことは間違いないだろう。しかし、それを可能たらしめたのは、かつてのロシアに存在した、「社会移動」だったのではないだろうか。

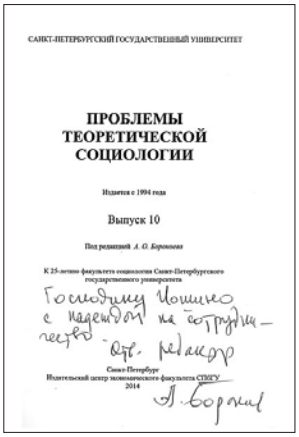
ウズベキスタンやタジキスタンからの出稼ぎ労働者の実情を見て、ソローキン研究者として、そうしたことを深く考えさせられた一日であった。

## ５．ペテルブルク大学社会学部での公開講義

現在、サンクト・ペテルブルク大学社会学部のキャンパスは、先日訪れた図書館のある本館の場所とは違うところにある。ペテルブルクの西北部に、スカイブルーと白のコントラストが美しい、スモーリヌイ大聖堂（Смольный собор）がある。その左隣が、社会学部があるキャンパスである。この大聖堂と同じ色彩を使い、そこに溶け込むように建っているのが印象的である（写真：中央がスモーリヌイ大聖堂、左側が社会学部のある建物）。

９月15日は、ペテルブルク大学の学生向けに公開講義を依頼されていた。少し早めに着いたが、アサラン・ボロノーエフ（Асалхан Ользонович Бороноев）名誉教授（写真、アサラン氏の研究室。頭上にコヴァレフスキーの肖像画が飾られている）が出迎えてくれた。

バイカル出身で、シベリア研究の大家でもある。他方、コヴァレフスキー学会名誉会長を務めている。すでに触れたコヴァレフスキーについていうと、彼はもともと古代史家として著名で、ペテルブルク大学の法学部で教えていた。その彼が、ペテルブルク大学社会学部の、有力な創設メンバーとして名を連ねている。アサラン氏は、そのコヴァレフスキーに関する論文も多数、手がけている。そして何より、ロシア革命でついえてしまった社会学部を、1998年に再建したのも、このアサラン氏である。


САНКТ-ПЕТЕРБУРГСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ УНИВЕРСИТЕТ

ПРОБЛЕМЫ ТЕОРЕТИЧЕСКОЙ СОЦИОЛОГИИ

Издается с 1994 года

Выпуск 10

Под редакцией А. О. Бороноева

К 25-летию факультета социологии Санкт-Петербургского государственного университета

Господину Ёшино с надеждой на сотрудничество. Отв. редактор

Санкт-Петербург
Издательский центр экономического факультета СПбГУ
2014

А. Бороноев

日本語は解されないであろうと知りつつも、拙著『意識と存在の社会学』（2009年、昭和堂）を差し上げた。ロシア時代を扱っていたこと、写真をふんだんに盛り込んでいたこともあって、興味を持っていただいた。アサラン氏からは、社会学部の雑誌『社会学理論の問題性（*Проблемы социологические теории*）』の編集者でもあることから、最新号にサインをして献本していただいた（写真、書き込みに「吉野氏の協力を期待します」とある）。おまけに、投稿する論文があったら、いつでも送ってください、と宿題も与えていただいた。

そうこうするうちに、ペテルブルク大学１年生

[14] Sorokin, P.A, 1927, *Social mobility* Harper & Brothers.

約30名を前に、特別講義を始める時間となる。最初にアサラン氏による開講の挨拶があり、それに続き、マリーナ氏の司会で講義は進められた。筆者が用意したのは、「日本におけるソローキン研究―報告者の研究経歴をふまえつつ」というテーマの講義であった。公開講義の話をいただいたときは、10年以上前に書いた拙著論文[15]を下敷きにして話すつもりであった。しかし、このさい、その後の研究史の蓄積についても補充しておいたほうがいいだろうし、各年代の特色や、日本社会学における研究の特徴を明らかにしておいたほうがいいと考えた。そのためには、ロシアの研究史との比較を試みてみるのも良いかと思い、いくつかの文献にあたった。大いに刺激を受けたのは、モスクワの国立研究大学高等経済学院に提出されたラジェブナヤ（Лазебная Ксения Павловна）氏の博士論文「Ｐ．Ａ．ソローキンの著作における象徴理論―歴史的・社会学的分析」である。特に本博士論文の附論に載せられている詳細な文献リストは[16]、ロシアにおけるソローキン研究史を、かなりのところ洗い出してくれている。この文献に触発されたことにより、講義の中で、少しは有意義な主張ができたのではないかと思っている。その主張内容は、あらまし下記の通りである。

ロシアと日本のそれぞれのソローキン研究史を比較した結果、分かったことがいくつかある。第１に、日本の研究は、数こそ少ないが継続的に進められていること。逆にロシアは、現在までに多数の研究論文が書かれてきたが、旧ソ連時代に大きな断絶があること。第２に、旧ソ連の崩壊、わけても2000年代以降に、ソローキン研究が激増していること。さらに第３に、日本の研究ではソローキンの農村社会学が高く評価されているのに対して、ロシアではこの方面での研究に乏しいこと、などである。

こうした内容の話を、日本人を見るのも初めてだという学生向けに、40分ほどレクチャーした（写真、ペテルブルク大学の学生向けの講義風景〔2016年９月15日〕）。質疑応答では、ソローキン研究に関する質問ばかりではなく、多様な質問が出てきた。例えば、「社会学を学ぶと、どのような職に就けますか」、「アメリカ社会学をどう思いますか」、「北朝鮮への良い対応は何ですか」などである。なかなか答えづらい質問も多く、若い学生の知的好奇心の旺盛さが印象に残った。

講義の終わりに、「ロシア人の間では、ソローキンの農村社会学への関心が少ない。それはなぜかを、よく考えてみてください。そこにロシアの国としての特徴があると思うのですが。これは私たちの宿題にしましょう」と述べて、結びの言葉とした。

ロシアの大学は、９月から新学期が始まる。ということは、入学したての新入生を相手に授業をしたことになる。講義と質疑応答は、英語で行ったが、時折、マリーナ氏がロシア語で通訳と解説をしていただいたおかげで、スムーズに講義を終えることができた。熱心に講義を聞いてくれた学生の約半数は、英語での講義を理解し、質問をすることができた。ソローキンの名前ぐらいは知ってはいるが、著作を手に取って読んだことは、まだないという。今後、大いに勉学に励み、この学生の中から立派なソローキン研究者が育ってくれればいいな、という期待が膨らんだ。

## ６．ペテルブルク大学付属図書館の貴重コレクション

翌16日の朝、ふたたび付属図書館を訪れた。むろん、ソローキンの貴重コレクションを見せてもらうためである。事務室に行くと、数十冊の著作が重ねられていた。半分ほどは筆者も所蔵しているものがほとんどで、それほど珍しくはない。しかし、決定的に違っているところがあった。それは、それらの本の一冊一冊が、ソローキン本人から送られたもので、しかも彼の書き込みや署名がなされていることである。アメリカに亡命した彼は、後年、母校であるペテルブルク大学に自らの

[15] 吉野浩司、2001、「日本におけるソローキン研究―書誌学的考察」『一橋研究』第25巻第4号、99ページ～131ページ。

[16] https://www.hse.ru/data/2013/10/24/1275791067/Dis_Lazebnaya.pdf（2016年12月９日閲覧）

著作および蔵書の一部を寄贈した。その自著のコレクションが、これにあたる。来るまでは、どういうコレクションがあるかも知らず、時間にも限りがあったため、ざっと目を通すのが精いっぱいであった。次回は、ぜひとも書き込みを、ゆっくり点検してみたいという思いに駆られた（写真、ペテルブルク大学図書館事務室にて）。

図書館からいただいた資料のなかに、数年前に開催された、20世紀初頭のロシア社会学の展示会の記事があった。また2016年11月には、「コヴァレフスキーにちなむ社会学会成立100周年（к 100-летию Русского социологического общества имени М.М.Ковалевского）」シンポジウムの開催にあわせて、同様の展示コーナーが開設されるとのことであった（写真、実際に展示コーナーが開設された。ペテルブルク大学図書館提供）。

それにしても、今日、案内役を務めてもらったマリーナ氏を見ていて、改めて痛感したことがある。それは彼女のような研究、すなわち未公開資料、手書きの原稿などを収集・整理したり、新聞記事を集めたりという作業は、やはりその国の人でなければ、なかなか手がつけられない研究である、ということである。その作業の途方もなさに無力を感じないではない。しかし、むしろ彼女らのような現地のソローキン研究者との、共同研究の可能性への期待が膨らんだことに喜びを感じたのも事実である。日本では得難い頼もしい研究仲間ができたことが、ペテルブルクでの何よりの収穫であった。

この日の午後、筆者は、高速鉄道サプサン（Сапсан＝ハヤブサの意）でサンクト・ペテルブルクのモスクワ駅から、モスクワのレニングラード駅へと向かった。約３時間半の乗車時間で、あっという間に首都モスクワに到着した。

## ７．アレクサンドル氏との再会と古書めぐり

モスクワでの第１日目、９月17日は、旧知のアレクサンドル・ユリエヴィチ・ドルゴフ（Александр Юрьевич Долгов）氏と会う約束の日である。ロシア語では苗字ではなく名前で呼び合うのが習わしである。彼の場合は、ドルゴフではなくアレクサンドルと呼ぶ。さらに親しくなると、アレクサンドルがアーシャと愛称になる。今回は、そのアーシャで通した。

モスクワ訪問の目的は、彼の職場であるロシア科学アカデミー情報科学研究所社会科学部門（Институт научной информации по общественным наукам РАН、通称イニオンИНИОН）と、そこでの彼の近況を紹介してもらうことであった。しかし、2015年1月30日の火災発生により半壊してしまっている。建物の再建は政府により約束されてはいるが、いまだ仮設事務所での仕事を余儀なくされているとのことであった。やむなく、今回は、イニオンへの訪問は断念せざるをえなかった。

アレクサンドル氏の近況を聞くと、ソローキン顕彰の勢いが盛んなスイクティフカル大学での国際会議に参加した他は、さしたる研究の進展はないそうである（写真、中央が写真を提供してくれたアレクサンドル氏、右側の女性は先述のラジェブナヤ氏）。

国際会議というのは、９月８日から10日の期間にスイクティフカルで開催された国際会議「ピティリム・ソローキンと21世紀のグローバルな開発パラダイム」のことである[17]。この会議には、先述のマリーナ氏およびラジェブナヤ氏も参加している。大会プログラムに目を通すと、議題として下記のようなテーマが並んでいる。

[17] 8–10 сентября 2016 г. в Сыктывкаре состоялась Международная научная конференция «Питирим Сорокин и парадигмы глобального развития XXI века»

（1）ソローキンと現代の世界
（2）ソローキンの学説から見た社会・政治的、法的、経済的な問題の現代性
（3）ソローキンの社会学的遺産
（4）ソローキンの著作における文化哲学
（5）ソローキンの哲学、社会・文化人類学
（6）ソローキンの著作における予測と予言
（7）ソローキンの教育理念
（8）ソローキンの社会・文化的モデルと現代の社会と文化的慣習
（9）宇宙開発、地球上の生命、そして人類に関する近代自然科学の考え方

アレクサンドル氏はソローキン協会のホームページ[18]の管理人も担当している。したがって、最近のソローキン研究の紹介や、アメリカにおける利他主義研究の動向などは、随時、そちらのホームページで発表している。

対談のあとアレクサンドル氏と連れ立って、ロシアの大型書店であるドムクニーギ（Дом книги＝「本の家」の意）に立ち寄ることにした。社会学の棚から、イサエフの『社会学の問題―利己主義、友情、階級的利害』[19]を見つけ出してくれたのは、本当にありがたかった。昨年、訳出した「哲学者としてのトルストイ」（前掲）でも取り上げられている、このロシア社会学最初期の人物の著作が、新刊本として存在していることも知らなかった。

次に、ドムクニーギの古書部門を調査した。1年半前に来た時には、コヴァレフスキーの『現代社会学（Современные социологи）』の第2巻があった。まだ売れ残っていたら、今回、買うつもりであったが、あいにく売り切れていた。他にも幾人かの社会学者の名前を挙げて書店員に検索してもらったが、いずれも在庫は無かった。やや気になる本としては、チチェリーナ（Б. Чичерина）の『科学の中の神秘主義（Мистицизм в наука）』（写真）が4,500ルーブルで売られていた。初期のソローキンの著作は、神秘主義に近いものがある。不可知なものに近づくための手段として、19世紀末から、世界的に神秘主義という思想が流行した。それがロシアでどのように受容されたのかを考えることは、ロシアの学問の歴史研究として、とても興味深いテーマである。ソローキン研究に限っても、晩年の利他主義研究は、神秘主義と科学とが結びついて、社会学の中に組み込まれたものである、とも考えられるからである。

ともあれロシア革命前後の書物の原書は、たとえロシア国内の市場に出回っていたとしても、ごくわずかであるのは間違いない。部数も少ない上に、革命期に廃棄処分となったものもある。ロシア国内でも、数冊しか残っていないものも多い。検閲により出版できなかったものもある。マリーナ氏がプーシキン博物館で発見した、あのソローキンの原稿も、元はというと、革命後、編集者が隠し持っていたものが、奇跡的に残っただけである。前回訪れた時の、コヴァレフスキーの著作を買い逃した苦い経験もあって、革命期の非マルクス主義的な社会科学の本に出会った場合には、直ちに購入しておくべきであるというのが、今回の教訓となった。

翌日、筆者はひとりで、モスクワの古い通りとして名高い、アルバート通りを歩くことにした。幾つかの古書店が、露天で、机に本を積んで売っている。社会学という分類のコーナーは、まず見つからないが、哲学などのコーナーに混じっていることもある。しかし比較的に社会科学関係の本を集めた店でも、やはりレーニン以降のマルクス主義的な政治経済学や哲学の本が大半を占めているといっていいだろう。特に筆者の研究に関わってきそうな本はなかった（写真）。

ただ1冊だけ、今回購入したのは、今晩夜行で向かうことになっているヴォログダを含む、北方

[18] http://cliffstreet.org/index.php/home
[19] Исаев, А. А., 1906 [=2010], *Вопросы социологии. Эгоизм, дружелюбие, классовые интересы*, Москва: Либроком.

ロシアの建築物を集めた大判の写真集である。それは『12世紀から19世紀ロシア北部の建築』[20]というロシアで出された英語の本で、500ルーブル（約950円）という安さであった。

## ８．交通の要所ヴォログダ

夜行列車でモスクワのヤロスラヴスキー駅（Ярославский вокзал）を出たのが９月18日21時、ヴォログダに到着したのは、翌朝の５時であった。寝台列車に乗ったのだが、相部屋で落ち着かず、寝台も狭く、あまり寝られなかった。夜明けの車窓から見えるのは、ひたすら針葉樹林の風景であった。

初めて訪れる街の場合、文字情報や映像だけでは、今一つその街の感じはつかみきれないところがある。いくら下調べをしてみたところで、現地がどのような気風の街であるかなどは、やはり実際に肌で感じてみるまでわからない。ヴォログダもそういう街であった。列車を下りてから、まだ暗い駅周辺を見まわしてみると、決して田舎というわけではないが、さびれた地方都市という感じの街であることがわかった。予想したよりも、小ぢんまりとした街である。荷物を置きに予約していたホテルに行き、そのまま仮眠をとることにした。

この街での調査の目的は２つあった。ソローキンは、ペテルブルクへ行く前に、この街に立ち寄っている。移動手段は船である。上記の自伝の記述にもあった、クプチクという小舟で、いくたびか港に停泊して、ようやくたどり着いたという。その当時の船や港の写真でも残っていれば入手したい、というのが１つめの目的である。調査のサポートを頼んだのは、レオニード・セルゲーヴィチ・パノフ（Леонид Сергеевич Панов）氏である。ヴォログダ国立大学（写真、大学構内のレーニン像）の教授で、地元の地方史研究者でもあった。彼はかねてよりソローキン研究も手掛けており、今回の調査には、またとない協力者であった[21]。

当時の港の画像は、すぐに見つけてくれた（写真、レオニード氏提供）。小舟クプチクの方は、なかなか見つからないという。ずいぶん探したそ

うだが、１枚もないそうだ。写真に写すに値しないボロ船なので、残っていないのも無理はないだろう。港は今、民間の船会社が所有しており、定期就航便はないが、チャーターすると舟遊びができるとのことであった。

このヴォログダの街は、ロシア革命の時期に、革命家の潜伏拠点となった土地でもある。社会革命党に属していたソローキンも、この地に隠れて、労働者を相手に演説をおこなったことがある。ちなみにスターリン（Иосиф Виссарионович Сталин, 1878-1953）も、革命以前にこの地に潜伏して革命運動を行っていたという。

この街では、川の流れはおだやかで、時間もゆっくりと流れている。初秋の気配ただよう川沿いの道を歩いていると、自然だけは当時のままの風致を残していることが想像できた（写真、左側にヴォログダ大学、右奥に聖ソフィア大聖堂がある）。

この街の調査の第２の目的は、ヴォログダからペテルブルクへの鉄道の旅を行うことである。ソローキンによる、例の無銭乗車でのペテルブルク行きの列車である。

現在でも10時間以上かかる、決して近いとはいえない距離である。当時はどれぐらいの日数をかけていたのだろうか。９月21日、午前７時46分、

[20] Fedorov, Boris Nikolaevich, ed., 1976, *Architecture of the Russian North: 12th-19th Centuries*, Aurora Art Publishers.

[21] ヴェリキイ・ウスチュグとソローキンとの関係を論じた、レオニード氏の論文については、本稿注９を参照のこと。

時間通りにペテルブルクのラドジェスキー駅（Ладожский вокзал）に到着した。

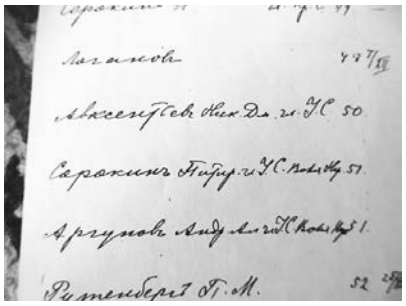
この鉄路の旅では、ささやかな発見があった。それは、ソローキン当時はまだヴォログダからペテルブルクへの路線が、できていなかったということ。レオニード氏の教示によるのだが、この路線は、ソローキンが利用したものとは違うということである。ソローキンが実際に乗ったのは、ヴォログダ駅からいったんヤロスラーヴリ（Ярославль、地図⑥）駅へと南下し、ベジェツク（Бежецк、地図⑦）駅を迂回してから北上し、ペテルブルクを目指す、という路線であったとのことである。地方史に詳しいレオニード氏ならではの見識であった。

もう１つ、レオニード氏の地方史家らしい知見について触れると、ソローキンが船旅の途中で寄港した船着場を言い当てたのもみごとであった。その船着場とは、ソリヴィチェゴドスク（Сольвычегодск、地図③）およびヴェリキイ・ウスチュグ（地図④）にあったらしい。

## ９．最終日のペテルブルク

調査日程では最終日にあたる９月21日、午前中は、エルミタージュ美術館（Эрмитаж）およびネヴァ川を隔てたペトロパヴロスク要塞（Петропавловская крепость）を見学した。そのいずれの建物にも、ソローキンが関わりを持っているからである。ただし当時と同じ建物ではあるが、ソローキンに関する歴史的研究の呼称としては、エルミタージュではなく冬宮（Зимний дворец）、ペトロパヴロスク要塞ではなくトルベツコイ要塞刑務所（Тюрьма Трубецкого бастиона）の方が、いっそうなじみ深い。

冬宮といえば、1917年11月にケレンスキー臨時政府が設置された場所であり、トルベツコイ要塞刑務所は政治犯の牢獄が置かれた場所である。帝政を倒す二月革命が起き、ケレンスキー内閣が成立した。その時、ケレンスキーを支える秘書官を務めたのがソローキンであった。この時、臨時政府の建物とされたのが冬宮、すなわち現在のエルミタージュ美術館である。



しかし、周知のように臨時政府は、レーニンのいわゆる十月革命により、短期間で潰えてしまう。ケレンスキー内閣の要人は、亡命するか、殺されるか、牢獄に入れられるかした。牢獄に幽閉された中の一人に、ソローキンがいた。トルベツコイ要塞刑務所の文書館に残っている囚人リスト（Ф 506 Оп 1 Д 1а Л 9об）には、51番目にソローキンの名が記されている（写真、マリーナ氏資料提供）。ネヴァ川を隔てて、かなり近い距離に冬宮と刑務所とが並び立つ。政府の官僚から一夜にして囚人へと転落してしまう革命期の騒擾が、容易に想像できた。

ソローキンのペテルブルクでの生活は、はたして幸福なものであっただろうか。学校を転々とし、革命運動家からケレンスキーの秘書官となり、いくたびもの投獄を経験する。文字通り、歴史に翻弄されたソローキンであった。しかし、話を教授資格の審査過程に限っていうなら、あるいはソローキンは幸いだったといえるかもしれない。そのあたりの事情を、自伝の第６章に依りながら述べてみたい。

〔要旨〕『長い旅路』第６章　教員になる準備：1914年～1916年

ソローキンによると、ロシアで大学教員職を得るための要件は、アメリカと似ているところも多いが、大きく違っているところもあるという。大きな違いは、学位取得の審査を受けるまでの期間、必ずしも授業に出る必要がないことである。また修士号の取得をもって教授の資格を有するとみなされていたことである。博士は、真にぬきんでた業績を重ねた人のみが有していた。というのが、ロシアの教授資格の特徴である。

修士号の取得には、下記のような審査を通過しなければならない。第一段階で口頭試問を通過すること。第二段階で、国内の優れた大学教員からなる組織委員会による、公開での質疑応答の審査会を乗り切ること。この２点がクリアできれば、教授の資格が与えられることにな

る。また、ごくまれなケースとして、すでに顕著な業績を残している学者に対しても、教授の資格が与えられることがある。例えば宗教哲学者ソロヴィエフ（Владимир Сергеевич Соловьев, 1853-1900）や統計学者チュプロフ（Александр Александрович Чупров, 1874-1926）や経済史家ストルーヴェ（Петр Бернгардович Струве, 1870-1944）などが、その例外的な学者である。

大学教員の職位としては、教授と講師とがあった。一般に、給料は正教授の方が高い。しかし講師の場合は、学生から講師料を徴収することができる。したがって人気のある講師は、正教授よりも高額の給料を手にすることとなる。そのため、あえて講師職に留まる学者も少なくなかった。例えばペテルブルク大学についていうと、トゥガン＝バラノフスキキーやゲオルギエフスキー（Павел Иванович Георгиевский, 1857-1938）が、そうした部類の人気講師であった。

ではソローキンは、どのようにして修士号を取得したのであろうか。ソローキンが修士号審査の申し出をした後、まずは膨大な文献リストが渡された。ロジン（Николай Николаевич Розин, 1871-1919）からは500本の刑法学関連の文献リスト、ジジレンコ（Александр Александрович Жижиленко, 1873-1930）からは刑事手続きについての250本のリスト、ラザレフスキー（Николай Иванович Лазаревский, 1868-1921）からは憲法学に関する150本のリスト、というようにである。これらの本を全てマスターしてから、修士号の公開審査を受けることを、再度申請するようにと告げられる。

通常、修士号審査候補生は、海外で研究するようになっていた。しかしソローキンがその準備を始めた1914年当時、ロシアは第一次世界大戦に巻き込まれていた。したがって彼は海外に出ることができなかった。しかたなくソローキンは、ロシア国内での研究を余儀なくされた。

しかし、そうした海外との隔絶したさなかにあっても、世界的に名の通った学者を輩出することができた、とソローキンはいう。例えば現象学的社会学者のギュルビッチ（Георгий Давидович Гурвич, 1894-1965）や法社会学者のティマシェフ（Николай Сергеевич Тимашев, 1886-1970）、あるいは憲法学者のラゼルソン（Макс Яковлевич Лазерсон, 1887-1951）などである。彼らはみなソローキンと同じ時期に、ロシア国内に留り、修士論文を準備した学者たちである。

ソローキンは、1916年10月公開審査を行う。ここでの口頭試問も、やはりアメリカの博士号の口頭試問よりも、はるかに厳格であるらしい。というのも第一に、口頭試問の期間が長い。ロシアの場合、４日間が試験に費やされる。ソローキンには、刑法、刑事手続き、憲法、そしてそれらに関係する論文の作成が課せられていた。第二に審査が公正かつ厳粛を極める。審査員には、法学の専門家のみならず、多様な専門を持つ学科の学者の他、関心を持つ教員や学生なども多数加わった。試験を受けるものは、こうした聴衆の面前であびせられる数々の質問や批判の１つ１つに答えなければならない。そうした質疑応答の時間は、５時間から７時間にも及んだ。

かつてないほどの興奮とひらめきの経験を得た、とソローキンは当時を述懐している。こうした審査を経てソローキンは、1913年に出版した『罪と厳罰』をもって、刑法の分野での修士論文として提出することにした。予定どおりことが運べば、1917年３月には修士号が授与されるはずであった。しかし時代がそれを許さなかった。同年に起きた二月革命が、その予定を狂わせたからである。大学の機能がストップしてしまったため、ソローキンは修士号を取得する機会を逸してしまった。やむなく審査は無期限延期を余儀なくされた。

その後の、1918年から1920年の間は、ソローキンにとっても、かなり厳しい状況が続いた。そのような中でも、彼は『法の一般理論（Элементарный учебник общей теории права）』（1919年刊）および『社会学の教科書（Общедоступный учебник социологии）』（1920年刊）、ならびに『社会学体系（Системе социологии）』（1920年刊）などの著作を書き継いだ。革命の喧騒冷めやらぬ時期である。出版は難しかった。それを出版に導いたのは出版社の友人セデンコ（Ферапонт Иванович Седенко,1886-1938）であった。彼はヴィチャーゼフ（Витязев）[22]との異名を持つ。『社会学体系』を出版にこぎつけてくれた働きについてソローキンは、セデンコによる「英雄的な努力」、と称えている。ことが動きだすのは、ようやく1921年の終わりになってからである。ペテルブルク大学法学部学科長と学科教員とが、ソローキンに博士論文を提出するように

求めてきたのだった。

1922年４月22日、学位審査特別委員会が設置された。口頭試問の様子は、『エコノミスト』第４号～５号（*«Экономист»* № 4-5, 1922 г.）に報告されている。学部を率いていたグレーヴス（Иван Михайлович Гревс, 1860-1941）が委員会を取り仕切った。まずソローキンの履歴書と著作リストとが読み上げられた。論文に関する論点の整理および方法と目的が述べられた。その後、総評に続き、批判点や曖昧なところの指摘がなされる。批判を述べる役目を担ったのが、タフタレフ（Константин Михайлович Тахтарев, 1871-1925）とカレーエフ（Николай Иванович Кареев, 1850-1931）であった。批判をことごとく退け、満場一致で博士号が認定された。もう数か月遅れていたら、ソローキンは博士号を取得できなかったであろう。1922年９月に国外追放の処分を受けたからである。

その後、ソローキンは亡命知識人として、しばらくチェコスロバキアに留まった後、最終的にはアメリカに渡り、世界的な社会学者として大成する。これらについては、次回以降の調査の課題となろう。

さて、いよいよ今回の調査の最終日である。9月21日の午後、筆者はペテルブルク大学准教授デニス・ミローノフ（Денис Викторович Миронов）氏と会う約束をしていた。上記のアザラン氏の教え子でもあるデニス氏は、特にマキシム・コヴァレフスキー（Максим Максимович Ковалевский, 1851-1916）の社会人類学的側面を追うという研究を続けている。

一般にコヴァレフスキーといえば、歴史や法制史の専門家として通っている。またロシア社会学の黎明期を切り開いた人物で、ソローキンの師の一人としても知られている。具体的には、古代法や共同土地利用の研究などを行っている。当然、調査するフィールドの古代から現代までの様々な民俗や生活や習慣にも詳しくなる。だから自然と社会人類学者にもなる。そのように語るデニス氏は、ペテルブルク大学で初となる社会人類学の分野での博士論文の作成者であると、自己紹介をしてくれた。

デニス氏のおかげで、コヴァレフスキーが住んだことのあるアパートを２カ所まわることができた（写真）。ソローキンの住居と比べると、たいへん豪華な造りのマンションであった。改めてウクライナの貴族出身のコヴァレフスキーの風貌がしのばれた。

**まとめにかえて**

ソローキンを通じて、ロシアの研究者や学生たちと出会い、あるいは日本にいては細かな情報の入らない未知の街を訪ね歩くことができた。各地で多くの研究者の知遇を得た。筆者の調査の目的に沿って日程を調整し、関係各所に連絡を取り、惜しげもなく研究成果や収集資料を見せてくれた。感謝してもしきれないぐらいの恩義を感じている。未知の異邦人に対する、この無償の援助というのは、むろんロシア人学者の美徳であるのは間違いない。しかし、さらに立ち入っていうと、それはロシア人の学問的コミュニティというものへの信頼によって成り立っているのではないだろうか。

思うに、寒村出身者のソローキンが世界的な社会学者にまで成長するためには、この学問的コミュニティの存在なくしてはありえなかったであろう。ソローキンの才能をいち早く見抜いたジャコフは、彼をペテルブルクに招いた。チェルニャエフは、夜学において田舎出身の彼に対しても、分け隔てなく高度な学問を学ぶ場を提供した。心理精神研究学院時代には、ペトラジツキーをはじめ、ドロベルチ、コヴァレフスキー、ベフテレフらの学殖に触れることができた。ソローキンのあまたの疑問や質問に、飽くことなく答えてくれた。逆にまたソローキンも、彼らからの将来への

[22] セデンコについては、上記のレオニード氏の下記の論文を参照のこと。Панов, Л.С., 1995, Переписка Ф.И. Витязева и В.Н. Трапезникова (Из истории Вологодского общества изучения Северного края) // *Вологодская старина. Послужить Северу*: ист.-худ. и краевед. сб. Вологда,С. 117-120.

期待を一身に受けた。そして、その期待に応えた。彼のペテルブルク大学への転学は、まさに、そうした縁により可能となったものである。そして幾多の困難を乗り越え、彼の博士号の学位取得を進めてくれた。

こうして社会学者ソローキンは誕生した。革命の後、彼はレーニンに死刑を宣告される。やむなく彼はベルリン、プラハを経て、アメリカに渡ることとなった。どこへ赴こうと、彼は温かく迎え入れられた。それは彼を受け入れる、学問的コミュニティがあったからに他ならない。

社会学をはじめとする学問の研鑽により、ソローキンは自らを受け入れてくれる学問的コミュニティの輪を着実に広げることができたのである。現在のロシアにも、その学問的コミュニティは根付いている。筆者が身をもってそれを確信できたこと、それが今回の調査旅行の、最大の収穫である。